加虐性恋歌

庵あん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
加虐性恋歌

【Ｎコード】
Ｎ８２２７Ｙ

【作者名】
庵あん

【あらすじ】
その毒を以て、私はそれを恋と呼ぼう。
恋愛掌握集。

人魚姫

エメラルドグリーンの海面に、冷たい人魚の肌を想った。
深海に生息する、その魚じみた人種の体温は、恐らく僕たちよりも遥かに低いのだろう。そして、その肉は苦塩と合わせて味わうのが常道かもしれない。白い脱体を乗せる大きなテーブルの上には、銀の食器と白ワインを添えよう。
ふと、塩素の匂いが強くなる。鼻をつく厭な匂い。海水を浄化して使用しているこの水は、決して人形の住まう場所のそれではない。では、僕の視線の先で、尾鰭を伸ばして優雅に泳ぐあれは、何と呼べばいいのだろうか。
水面にその美しい幻想の影が横切った。
コバルトブルーの水中を泳ぐ、人魚に僕は声を掛ける。碧い海面から、青い光に濡れそぼったプールサイドへと浮上する彼女の脚には魚じみた鱗も鰭もない。しかし、艶やかに白い躯に纏わりつく、濡れた黒い髪は海藻めいていた。

彼女と付き合い始めたのは二ヶ月前。
最初に声をかけたのは、どちらだっただろうか。四方を、そして、頭上までもを水槽が覆う、そんな蒼に微睡むアクアリウムの中で、それは御伽噺みたく、うたかたの様な、曖昧な時間だった。
そう、まさに幻想的な。
周りを囲む水の蒼さに僕は狂わされていたのかもしれない。或いは、蒼を映した彼女の瞳に取り憑かれて仕舞ったのか。非現実の中で出会った大人の雰囲気を持った女性に……。否、もしかしたら、蒼を宿した瞳の奥、その深海に潜む人魚姫に魅入られたのかもしれない。
そう、あの時間はこの室内プールの、プールサイドよりも青かったのだ。それは溶けるように。

「あの、何か飲みますか？」

「いい。少し寒いの」

「それなら、少し休みましょう」

「そうね」

初めは、年下の彼氏もいいものね、と思っていた。

けれど、それも幻想。ひとときの猶予い。

現実という地上は、私にとって息苦しくて堪らない。それなら、ずっと理想という海中に沈んでいたいと嘆いていた。腐った海藻の様に絡みついてくる人間関係も、ヘドロの様に堆積している日々のストレスも存在しない、海底へ。

水族館へ足を運んだのも、そんな息の詰まる日常から逃げ出したかったからだ。

そんなときに出逢った彼が私に溺れているのが、今は救いかしら。プールサイドで無邪気に笑う彼の笑顔に、ときめくこともある。ベッドの中で子供みたく甘えてくる彼にも。彼の、一途で純粋なところが愛おしい。

王子様とは、かくあるべきだ。

今は、これなら地上も悪くないわね、と思っている。

そんな年下の彼の異変に気がついたのは、残業終わりで息苦しさに耐えながら帰路についている時だった。あの時、振り返らなければ良かった。ネオンに色めく街の、銀色に光る魚の群みたいな雑踏の中。私よりも若い女を連れて歩く彼の後ろ姿を見つけたのが始ま

り。
その頃から、彼が私をデートに誘うことが少なくなった。私の部屋に来ることも少なくなった。仕事が忙しいという、何とも在り来たりな理由。お姫様を退屈にさせる、王子様の悪いところ。
何となく、彼が離れていくような、手の届かない場所に行ってしまう様な、そんな気がした。否、それは根拠の無い確信だったのかもしれない。
でも、その確信は時間の経過で、揺るぎないものに変わってゆく。
そのとき、すべては幻想なのかもしれないと思った。
或いは、御伽噺――

「最近、忙しいの？　仕事」

「はい。大事な仕事を任されちゃって」

「そう。大変ね」

「すみません。寂しい思いさせてしまって……」

「いいのよ。仕方ないもの」

そう、寂しそうに呟く彼女の首筋にキスをする。彼女の口から、甘い吐息が漏れた。それは泡となって、海面へと浮上する。髪と香水の匂いに酔いそうだ。やはり、人魚なんてものは幻想だった。否、現実に、本当に存在するのかもしれない。しかし、地上で生きる男は、同じく地上の女に惹かれてしまうものだ。そうして、幸せな家庭を築くのが人間だろう。
人魚なんて、遊びでいい。

きっと、それは御伽噺のようなものなのだろう。結末はいつも泡沫の夢。仄かな潮の香りを残して、岸部に打ち付けて消えて仕舞う、波の様に。或いは、人の記憶の様に。

――それはそれは、白く、はかない、夢なのでした。

そう思うこともできた。そうすべきだった。彼にとって私は年上の女なのだから。そういう?潔さ?は必要だった。覚悟していたつもりだった。

けれど、どうしても、許せなかった。

その純粋な瞳に騙された私は愚か者。年上のくせに一途で馬鹿な女。そう思われているのだとしたら……。単に、からかわれているだけだとしたら。弄ばれているだけだとしたら。本気じゃなかったら。

全部、溺れた振りだったとしたら。

深海から浮上する泡の様に膨張する感情が私の中で、弾けた。黒い水面に映る自分の顔を見つめながら、もう押さえられない憤慨と憎しみに震えている。

これが最後の確認だ。

「ねえ、約束。覚えてる?」

「約束?　何の?」

「……ううん。何でもないわ」

「そうですか」

人の口約束なんてものに、未来を左右するような力は存在しない。彼女の年齢なら、そんなことくらいは知っていて当たり前だろうと思っていた。

人魚とは、意外と純粋な生き物かもしれない。

だからこそ、人魚なのだろうか。叶わぬ恋に消えた。一途で、愚かな女。

そんなことを考えながら、まだ湯気の立つコーヒーに口をつける。これから触れる人魚の冷たい肌の感触を思い浮かべて。その脚に更に冷たい鱗が存在しないのが、残念ではあったが。しかし、その黒い苦汁を飲み干したところで、強い睡魔に襲われた。意識が海底へ引き込まれていく。

何かおかしい。

暗い深海へと沈んでいく視界の中で、人魚の横顔が幽かに笑った。

「ウソついたら針千本のーます」

セイレンの歌声に導かれるように、視界が浮上する。

否、舵をとられた。

霧の様に朦朧とする意識の中で、身体を動かすことができなくなっていることに気がついた時には、全てが終わっていたのかもしれない。椅子に縛り付けられている。目の前に彼女がいた。

彼女の瞳に、何より深い憎悪を垣間見た。凍り付く。

サルガッソーの、怨念の藻屑に捕まったようだった。

にこやかに。微笑みながら、彼女は硝子のグラスを僕の目の前にかざす。大量の縫い針が入ったグラス。それは、無機的な蛍光灯の光の中でも、太陽に恋をする海面みたく、キラキラと光を乱反射している。

一瞬、その無数の針が喉に突き刺さる様を想像した。それはきっ

と、灼けつくような痛みだろう。
性質の悪い夢だと思った。

「ねえ、飲んで？」

「そんなことできるわけ」

「飲みなさいよ。嘘、ついたわよね？」

「嘘？　何を……。何のことですか」

「ねえ、飲んで。裏切ったのはあなた。当然の罰でしょう？」

「そんな……。だからって」

「飲みなさいよ！」

「む、無理です……」

「あら、指切りの方がいいかしら？」

「もう、やめてください！」

これは人魚を怒らせた罰なのかもしれない。
美しいが故に、嫉妬深い生き物なのだ。だから、深海に幽閉されているのかもしれない。
否、もっと恐ろしい生き物だろう。その人魚の見る夢が踏み入れてはならない幻影めいた深い霧だ。その中で舵を離せば、たちまち、

御伽噺の中の魔物たちに襲われ、船は波に呑み込まれて仕舞う。
人魚というのは――

灯台の下、防波堤の先端。テトラポットの傍から黒い海へ。
かつて愛した人間を棄てる。流れ出る赤い血をバスルームで洗い流した時、すべては泡沫と消えてしまったのかしら。真っ赤な泡となって、紅いさざなみと掻き消えて。すべて、質の悪い夢だったのかもしれない。
夢の様な、白く、儚い泡沫。
随分と長い間、その泡を見つめていたように感じる。すっかり、夜の闇を海面は映してしまっていた。太陽に愛されて輝く海も、太陽が居なくなれば、途端に黒い水。
――それこそ、御伽噺の様なものなのでしょう。

潮騒の中でテトラポットに座る人魚姫は、恋人に別れのキスをして。
最後に残った王子様の首を海へ投げ入れた。
それは泡となって、何もかも、消えてゆく。
夢に微睡み、波間に猶予う、泡沫のように。

人魚姫
The Sadistic Love Song

是にて、了。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8227y/

加虐性恋歌

2011年11月24日15時46分発行